
エミヤ in GS

hisuison

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HIMIYA.NET

【著者名】

NIGHT

【あらすじ】

理想の破れたヒミヤの前に現れた懐かしの旧友うつかりで女の子にされたうえ異世界に飛ばされるはめに、目が覚めると非常識だけの世界に・・・

横島とヒミヤの考え方の違いや方法でブチ当たつしていく幸せのための物語

プロローグ（前書き）

シロウトのうですので、嫌だと言つ人はこのまま回れ右をして下さい。

設定も一部作者のいじくりが入っています

プロローグ

体は剣で出来ている。（I am bone of my swo
rd.）

血潮は鉄で 心は硝子。（Steel is my body, a
nd fire is my blood.）

幾たびの戦場を越えて不敗。（I have created o
ver a thousand blades.）

ただの一度も敗走はなく、（Unknown to Death.）

ただの一度も理解されない。（Nor known to life
e.）

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う。（Have with s
tood pain to create many weapo
ns.）

故に、生涯に意味はなく。（Yet those hands w
ill never hold anything.）

その体は、きっと剣で出来ていた。（So as I pray,
unlimited blade works.）

ある男は自身の信念を貫き英雄へ

ある時は、金色の悪魔の執事をして・・・

ある時は、赤い悪魔の実験台に・・・

またある時は、ある屋敷のメイドにおちよへりれながら
己の理想を信じ、じわりじわりと壊れながら歪んだ結晶となつてい
つた。

完成した結晶は儂く、信念もつゝには摩耗し、抱き続けた理想に絶
望して、かつての生き方を憎む。

しかし、過去への復習劇は赤い悪魔の前に消え去ることになる。

s i d e ? ? ? ?

変わり果てた街は荒地になり、瓦礫のあぢあぢから煙が上がつ
ている。

立っている者は2人、もうずく190「届きそつな長身の白髪の男・
黒髪ロングヘアの女だけだった。

「ひさしひりだな遠坂」

今、Hミヤの前には聖杯戦争当時より10年経つてより美しく成長
したロングヘアの女性がいた。

「お久しひりね士郎・・・いえアーチャーと言つた方がいいかしら。
結局あいつと同じ道を進もうとしてるわけね。赤い外套まで着てし
まつて姿までそっくりね」

遠坂は悲しみや怒りが交じり合つた瞳をしながら士郎に皮肉に語り

かける、事実エミヤの姿は聖杯時代に召還されたアーチャーに瓜二つだが。

「確かに私は奴にそつくりだらう、だが今でこそわかる」とある。奴の言つていた意味がそして、やるうとしていた事が・・・私が・・・いや衛宮士郎が存在すること自体が全ての間違いの始まりなのだ

「...」

エミヤが話している最中も遠坂は下を俯きながら震え続けていた。

「すでに私は世界と契約した、あとはウグ・・・・・・ グシャ！」

素早い動きでエミヤの懷に入った小さな体は、赤白く輝く左の拳をエミヤの鳩尾を捉え深く抉りながら吹き飛ばし、天高く上がったエミヤの体は重力に従い急落下し地面に叩きつけられた。

「つるさこつるさこつるさい・・・聞いていれば勝手に自己完結しちやつて、あんたが進んできた道は周りの人を捨ててきたんだから後悔は許されないはずよ。どうしてもやり直すと言つなら今から鍛え直してあげる。」

腕を前に組みながら、ゆっくりと士郎のもとへ歩き始める。エミヤはよほど深く抉られたのか褐色の顔から流れ出る汗を拭き、何事もなかつたように立ち上がろうとしても膝が震えて立つことが出来ないでいた。

まさに左を制するもの世界を制すであろうか・・・

「さすがに今のは効いたぞ遠坂、そのパンチこそ私の求めていた究極奥義ウニグ・・・レインーだ・・・・・つは！何だ今のはどう

やらあまりの痛みのせいか怪しげな電波を受け取ってしまったようだ、遠坂待て！待つんだ！そんなにこやかな笑顔で近づかないでくれ！」

エミヤはすでに自分の復讐など忘れ、必死に遠坂を諫めようと魔術回路を起動する。思考に出て来るのはブルマを穿いた小悪魔の姉と竹刀を持ち一いつちに手を振る陽気な姉「お～い！…」・・・忘れよう、きっと先ほどの拳のせいだろう。

そうか！アルトリア彼女ならと考へてみる・・・「シロウジ飯はまだですか？」

駄目だ・・・。

などと考へる間に遠坂はエミヤの前に着いて何やら地面に紋様を描き始める、エミヤは虚ろな目で脳内戦闘中だ。

「リン、話は終わりましたか？」

「話はしてないけどいいでしょ持つてきバゼット。OK、後はこれ書けば出来上がり！」

瓦礫から現れたバゼットは担いでいた170cmはありそうな、大きなアタックケースを地面に下ろし中に入っていた、モノをゆつくりと地面に置いた。

「リン、準備完了です。後は貴女次第です、決して何時ものうつかりはしないように」「ひめさまはね！始めるから黙つていてよ。」

ゆつたりとした動作で地面の紋様の上に手を掲げると瞳を閉じ悶え始めた。

Anfang

セット

It is a sheep according to the law of the world that does and is pitiful.

世界の法に従いし哀れな羊よ

Becoming it soul it is possible to untiring it now.

今解き放て哀れなる魂

The soul is led to the body.

魂は肉体へと導かれる

My Grammar is completed now.

今我の魔術が完成する

Revenge on the world.

世界への復讐

唱え終わるや否や眩いほどの光がバゼットの用意したケースからエミヤの体に向かつてはしつて行き、体につつすらと巻きついて見える鎖を破壊していく。

「な！何をしているんだ遠坂、一体なんだねこの怪しげな光は？」

「あんたは黙つて其処に座つてなさいすぐに終わるわ

「ミスターエミヤ、ご冥福を祈ります。」

「待て！！何を祈るんだ、その前に君は一体誰だ。それに今にも私を食べそつなあの光は・・・くつ、投影開始」

出てくるは共に戦場を越えた相棒のはずだった・・・その手に出たものを見るまでは、何故スプーンとフォークなのか!?目の前が暗く霞む中、昔の口癖が思い出される。

「なんですか・・・」

エミヤの体が大きな光の繭に絡まれた中、遠坂は静かに繭を眺め続けていた。

バゼットはと言つとガスバーナーコンロを使い鍋に火を沸かしていった・・・右手にはカツプレー門が握られている。

約2時間が過ぎようとしている頃、辺りは薄暗くなり光も落ち着き始める。

バゼットと遠坂は、近くの瓦礫に腰掛コーヒーを飲んでいた。

「あと二三十分は20分ちょっととか・・・早く出てきなさいよ

「・・・あと20分ですか、少し席を外します」

バゼットが離れていく背中を見ながら握っていたコップをきつく握り締めた。

7分程たつ頃微妙に爆音が響き始め、遠坂は繭に向けて歩き始める。

プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ゆっくりと更新していくので御覧頂けると幸です、今回ご覧して頂きありがとうございました。

お疲れ様です

(○^_^○)

新たなる道（前書き）

誤字があつましたので変更致しました。

事件段階 実験段階

指摘して頂きありがとうございます(^ ^)ノ

今後とも皆様方よろしくお願いします！

新たなる道

s i d e ? ? ?

もふもふ・・・ふふふこれは完璧な毛布だ！

なぜか手が非常に小さくなっているような気がする、とにかく確認しておこか

解析開始

ミシ

リ

性別：女

年齢：0歳

身長：139cm、体重：34kg

身体年齢：14歳

身体能力：全体的にワンランクダウン

魔術回路、27本正常稼動に加え、全て遠き理想郷半稼動、からの離脱による貯蔵量の増加

魔力量、最盛期のおよそ2倍（固有結界10分弱維持可能）
靈体化、受肉により不可

生まれたてほやほやだと！…これは何かの間違いかね、そうにちがいない性別まで変わるなどありえんからな。これは夢に違いない、頬を抓れば・・・痛いし柔らかいな～あははははははは。

いつたん落ち着くか、身体能力の低下と魔力の増加戦略術の変更をする必要がありそうだ。とにかくこのもふもふしたものから脱出しよつかね・・・

side 凜

眼の前まで来るとやわらかそうな繭の中から小さな手が飛び出してきた、少しこわい気があるような気がするけど問題ないでしょ。そういう時の私はそう思っていた。

何だらうかこの小さな生き物はセイバーを小さくしてピンクのパジャマを着せたような小さな少女？

眼元は昔と変わらず鋭い鷹だが開いた瞳は透き通った青空のような瞳、小学生のような小ささだった……あは、やつちやつたかも！

「凛、これはどうなつているのだ。」

生意氣にもこの小さな生き物は腕を組み見上げてくる……やるわね私の何かが目覚めそうだわ。

「違うわよこれは……そう、大成功よ！これであんたが追われる」ともないでしょ」

「ふつ・・・まあいいだろ？お礼だけは言つておこう。だがなぜ私の頬を突くのかね？」

「え？ これは確認よ、あまりにふにふにして気持ちよさそうだから突きたくなつたとかじやないわよ」

明らかにしき臭そうな凛から距離を置いてエミヤは体を動かし確認していく。

「リンあちらの清掃は終わりました、ミスターエミヤは……」「ありがとうバゼット何してるの？」

スーツに付いたほこりを払いながら帰つて来たバゼットは変化したエミヤを見ると体から怪しげなオーラを放ちながら、エミヤを抱き上げてしまつた。エミヤは怪しげなオーラに囲まれて身動きが取れないでいる。

「リンどこで拾つたか知りませんが私の報酬はこの子でいいですので、失礼します」

「待ちなさい、あなたの抱えてる子がエリヤよ。だから持ち替えはゆるさないは」

「そんな・・・」

かなりショックだったのか、バゼットはその場で膝をつきうなだれ始めるが凛はやっとバゼットから脱したエミヤに向きなおり、表情を引き締めなおし懐から紙をとり読み上げていく。

「鍛錬の魔術師衛富士郎、協会の命により貴方を拘束しに来ました。大人しく拘束されるなら手荒なことはしません、もし歯向かうなら実力行使させてもらいますつと。まあ、今から飛んでもらうあんたには意味のないことでしょうね」

「やはり協会の使いとして来ていたんだな。しかし飛ぶとは?・?・?遠坂まさか辿り着いたのか」

「いえまだ未完成よ、実験段階だから成功する確率も少ないわ。まさか、こんな形で試すとは思わなかつた。」そう言つと凛は足の付けね辺りに付いているナイフポケットから一つの豪華な短刀を握り、構え魔力を集中し始めた。

「さて遠坂!今確かに未完成と言わなかつたかもう一度考え方直すんだ。君の場合もしどと言つうことが「士郎逝つてきなさい!」待て字が違う」

Anfang

The one that rules the innumerable world and is worth
無数の世界を支配し足るもの
I am those who open as for the
door.

私は扉を開きし者

I t . . t r u t h o f t h e w o r l d . . t ouc
h e s .

世界の真理に触れあい

T h e t r u t h o f t h e w o r l d i s c h e a
t e d .

世界の真理を欺くき

T h e d o o r i s o p e n e d n o w .

今扉を開き

R e c e i v e t h e f o r e i g n b o d y i n t h
e w o r l d .

世界の異物を受け取れ

T h e w o r l d s p a c e m o v e m e n t

世界空間移動

凄まじい轟音と共に士郎のいたはずの場所は陥没し始め、中心部から
はブラックホールが現れ紋様内の物をすべて吸い込んでいく。
凛とバゼットは耳を塞ぎながらその光景を見つめ今後のことを考え
ていた。

新たなる道（後書き）

お疲れ様です

次回はちょっと遅め更新になりそうです、始めからこの調子かよ+

^ ^ ;

よければ皆様のご意見お願いします。

非常識な新世界（前書き）

微妙な位置にコノマが着いていたのでやり直しました

非常識な新世界

真っ暗な空間の中を漂いながらエミヤは過去の出来事を思い出して、その空間の中は時間の概念がないのか時間の経過すら感じることが出来ない。

どれだけ経った頃だったか、急に体が吸い寄せられ体が明るい世界にほり出される。

ほり出された先は地上から數十㍍あろう上空、険しく壮大にある山々がよりいつそう清々しく感じる間違いなくぶつかれば跡形もなく散れるだろう。

「遠坂確かに素晴らしい山々だが、君は私に何か恨みがあつのかね・

・投影開始」

召喚したのは三叉戟、ポセイドンが地を擊つて塩水の泉を湧かせた槍である

『泉を欲しだしたる矛』

槍の能力を生かしエミヤは地面にぶつかる直前に地面に突き刺す、突き刺された槍からは凄まじい勢いで水が飛び出しエミヤを地面の直前に空に打ち上げ、体を強化して危うげだが着地する事には成功した。

「我ながら滑稽な格好だが仕方があるまい」

着地すると周囲に気配が無いの確認し、ぶつぶつと咳きながらびしょびしょになつた服を脱ぎ投影した物干しにかけていく、念のため外套を投影して着ておくことにしたが。

それにしてこの周りはかなり魔力が漂つていて、聖地なのだろうかなど考えているエミヤだが次第に瞼が閉じて思考が回らなくなりはじめていた。

早速、肉体に精神が引っ張られているのかなど思いながらも外套に包まるように身体を丸め睡眠にはいったしまった。

Side ???

確かにこの辺で魔力を感じたのですが・・・もしかすると魔族かもしれないですね、全く鳥巣さんの紹介の人達が来てから管理人をすることが大変です。途中で置いてきてしまったけれどあの人たちは大丈夫でしょうか？

ごつごつした岩の上をしばらく歩くと、次第にホンノリと明かりがみえてくる。

ゆっくりとした動作で近づくも周囲には物干しに干された小さな服と、それを乾かすための焚火、赤い布に巻かれた少し魔力を出している荷物？

はて、持ち主はどうやらに行つたんでしょうか。

！？今あの布が動いたように見えましたね、念のため注意して調べてみましょうか。

Side ???

むふふふ、待つてふわふわの饅頭私が食べてあげるから。

よく見たら動いてるような気がするが気にしない、いただきますー！

「スッと言つ音と共にくる痛みで眼が覚めるとそこには、鉄の棒らしきモノを構えながら殺氣を向けてくる赤い髪の女性と、地面一面に鮮やかな赤の湖を作る上下GジャンGパンの青年がいた。

「美神さん何するんすか！俺はただこのチビン口に噛まれそつな女神さんの麗しき胸を守ろうとしただけなのに……」

「あんたは何あほな事してるの！」

湖のように広がる血液の中から瞬時に回復した。青年は立ち上がり抗議するが、鉄の棒で憐れな程ボコボコに殴られ見てはいけないものになつていぐ。

遠坂お前はまだ優しかったんだなと、心の中で思つエミヤだがこのふたりの奥の部屋から流れてくれる竜気につづき対処方を弾き出していく。

「あら、お田覚めになりましたか？私はここの人間、小竜姫です。何故あのよくな所にいたかは分かりませんが、しばらくの間ここで身柄を拘束させてもらいます。・・・何してるんですかあなたたちは。」

小竜姫とエミヤの調度左横辺りでは壮絶な戦い・・・いや暴力が続けられていた。

この出来事を見たことにより青年はただ者ではない、エミヤの中で青年のプロフィールに不死身と記される。

「はあはあはあ・・・何もやつてないわよ」

美神はすぐさま鉄の棒らしきものを背中に隠すが、地面に広がる池は果てしなく広がり続けるのである。

大丈夫なのかこの量、とつくに人間の致死量は越えてると思つが？ 微かに同情するエミヤであった。

「管理人？まあいい・・・すまぬが小竜姫とやら、私を拘束するとはどういった了見かね？その二人と違い私はただの一般人なのだ

がね

エミヤの問いに対し小竜姫は腰の刀に手を当て眼を鋭く細め竜気を叩きつけるが、周囲にいた美神と青年は腰を抜かして座り込む中、エミヤ本人は素知らぬ顔で流し通す。

「竜気を受けて平然としておきながらそのようなことを言いますか、それに私は貴方が睡眠を取っている間微量ですが魔力を感じましたか！」

小竜姫の言葉を聞いた瞬間、美神と青年は急いでこちらに構えなる。

「ふむ、魔力が漏れていたのか仕方があるまい。確かに私は一般人ではないが君達が私に危害を加えん限りはこちらからも何もしないと約束しよう。」

エミヤは仕方がないとばかりに肩の力を抜き、お手上げ状態と手を挙げる。

「ちょっと、そっちで話が進んでるけどどういひよー。」

自分達がのけ者にされているの気がついたか、美神が一人に向かってくつてかかる。

「すみません、あなた方は先に程の場所で修業の続きを続けますので先に向かっていて下さい。」

「うつ、わかったわよ。」

小竜姫とエミヤが向き合つ中、美神と青年は小竜姫に言われた通りに扉を開け何処かに向かつていった。

しばらく睨みつけていた小竜姫だが、なにか諦めたのか力を抜きエミヤに背を向けながらエミヤに対し注意を促した。

貴女には少し此処で待っていてもらいます、くれぐれもへんな氣を起さないようにしてください。」

そう言つと小竜姫も何やら小さな式紙らしきものを残し、美神達に向かつた扉の外へ向かつた。

残された式紙とエミヤはお互いを見ながら苦笑いとにかく此処がどこなのかを調べる必要があると、扉に手をかけるがまたぐびくともしない扉に対して今度はため息をつく。

「貴女は此処から出ることは出来ませんので」「了承を」

小竜姫を手のひらサイズにしたような小さな式紙はふよふよとエミヤの頭の周りを泳ぐように回りながらエミヤに話しかける、実に頭の柔らかそうな式紙だと思いながらエミヤはもう一度部屋を見渡してみる。

まるで昔の中国の家を表したかのような構造だがまさに密室間をと呼ぶに相応しいだらう。

そういえば、目覚めた時から着せられているこの修行僧のようなの服は非常に私の体にフィットして、動きやすい此処の普段着なのだろう・・・それにしてもこの式紙はなにをにじに私の頭の上でくつろいでるのだろう。一応私を見張っているのだろうが

「すうい綺麗な髪ですね～むふふ！」

実際にのんびりした喋り方で鼻歌まで歌いだした式紙にエミヤは頭を痛める。

「君は私を見張つてゐるのだろう? 何故そんなにくつろいでいるんだね。」

「やつですよ~私はちゃんと貴女を見張つていますよ~」

ミミ小竜姫はどこからか団扇までだしくつりこでいる。

きつと突っ込んだら負けだと必死に耐えるHIMIヤだが、前の扉から現れた服を着た猿? を見てついになじみの言葉を言つてしまつた。

「なんですか・・・」

HIMIヤは此処に来て明らかに現実離れしている状況を無理やり飲み込み、目の前の猿に対して警戒心を強めた。すでに式紙は頭の上で気持ちよさそうに寝始めている・・・まったく役に立つていない式紙である。

「つきー!」

「何をする、離さんか!」

猿はHIMIヤの手を掴み部屋の扉を開き別の部屋に入った。別の部屋に踏み込んだ時、違和感を感じながら前を行く猿について詳しく情報を得ようと猿を解読する。・・・出てくるのは前の猿が通常の生物ではないと言つ非常識な事だけ、HIMIヤはため息と共に諦めを感じながら進んでいった。

アーチャーVS齊天大聖

side ???

「また負けただと、なぜ勝てん……つは！私は一体何を」

俯いた形で固まつたエミヤは今まで何をしていたのか、振り返つて考えてみる。その後、何故か猿に連れられやつて来たのはテレビゲームの前。

ついついやつてしまつたが、この猿の鮮やかな手捌きには頭が下がる。私の次の動きが分かるかの「ことく私のキャラクターを倒してしまう、しかし下準備の時間は終わりだ……今では30%の勝率になつていて。

違うぞ、そうじゃない私はどうしてしまったのだ！！落ち着いて考えろ、私は何故猿とゲームをたのしんでいるのだ。小竜姫とやらはどこに行つたのかね？

「これ落ち着きけ、お嬢さん集中が途切れると追いだされるぞ。」

「サ・サ・サ・サルが喋るだと！…う、なんだこれは……」

焦つたエミヤの体がブレ猿の前から消え去つた。

「ふう、わしとなかなかの勝負をするとはな。」

猿はコントローラーを構えたまま納得したのか一つ頷くと姿を消し、先ほどまで賑やかだったテレビは静かに沈黙するばかりだった。

side 小竜姫

美神さん達の練習を一時中断して老師が出てくるのを待つ、きっと

老師が先ほどの彼女の事を確かめてくださるだらう。・・・先ほどゲームに飢えていた事が気になるけど、さすがに齊天大聖老師も自重してくださるはず。小竜姫は淡い期待を抱きながら暗がりの部屋に入つて行く、暫くすると老師が後に立つてバナナを食べていることにきがついた。

「老師様、彼女は如何でしたか！？やはり魔族でしょうか？」

「いや、素晴らしい見込みどころのある者じゃた。わしのあの技を避けおるとは…」のバナナはどう産かの？」

問い合わせられた老師は眼を輝かせて、豪語する・・・ここまで誉めるとは老師の技とはどのような技なんでしょう？

「そろそろ戻つてくるじゃろう」

老師がおっしゃると同時に椅子にすわった少女が現れた。

「むー、いつたいこれはどうなつている・・・」

「小娘、準備運動はおわりじゃーお前の魂はわしの精神エネルギーを大量にうけて加速状態にあつたのだ。今からおぬしの能力を見させてもらひ、小竜姫呼ぶまで小僧達の修業の続きを見ておれ。」

「わかりました、老師さま」

「やれやれ、此処の者は常識を知らんのかね。まあいいだらう、仕方あるまい」

言われるまま猿のあとを着いて行く少女に小竜姫は不思議と二人が孫と祖父に見えた。

side ???

猿のあとを歩き着いたのは広大な平原だつた。

「素晴らしい景色ではあるが、一体このような領地が何処にあつたのだね。」

「なにわしが暇潰しに作り出した空間よ、気にするでない。では行くぞ小娘……！」

そういうと、先程までエミヤと同じ大きさであつた猿が突如として巨大化した。

「なんと馬鹿でかい、全く樂をさせて貰えないらしいな」

エミヤは口元を緩め微笑む、小さな身体からは朱い魔力が漏れだし身体に巻き付き次第に西洋の甲冑の様な形が出来あがり、少女は両手を斜め右になにかを持っているかのように構える。

「これはなかなかの魔力よ、わしはおぬしの事が余計に気にいつたわい。では行くぞ！」

斎天大聖が出す鋭い突きを紙一重でかわいくながエミヤの中で情報が書き換えられていく。

世界の認証要所

記憶修正 真命：？？？

所持武器 剣・弓

戦闘スキル 幸運：B 対魔力：A 騎乗：B

身体能力の変化により精神に誤差発生、直ちに修正。
変更により戦術の情報を提供します。

なんだこれは？私の情報が書き直しだと・・・よりもよつて彼女自身になってしまったというわけか、冗談もほどほどにして欲しいが？まあいい、今は目の前の化け物を倒すか。

彼女自身にならうとも、この身は剣如何なる者にも敗れる事はない！

目の前に迫る棍棒を剣で弾き、懷に入り剣を振るうが棍棒に弾かれ後方へと飛びくと前面に迫る拳を受け流し、拳を蹴り体を捻りながら後方へと降り立つた。

瞬間の出来事であるが地面にはじつそりと抉られた後が生々しく残つていて。

「『』老体代よ、手加減と言つものを知らないのかね。普通ならひとつにあの世行きではないか。」「

愚痴るエミヤに気にせず棍棒を構えて静かに待つ老猿にてエミヤは武人を感じ。体を整え剣を構えなおす。

「やるの小娘・・・いや、小娘など失礼にあたるぢやない。我名は齊天大聖なり。尋常に勝負を願つ」

「名乗られても、名乗り上げるほど大した名前がないのだがね・・・

アーチャーと名乗つておいつ」

エミヤいや、アーチャーは皮肉な言葉をしまい誇り高き王のようだ背筋を伸ばし名乗りをあげる。

side 齊天大聖

なるほど、アーチャーか・・・剣を構える『兵』とは言ひ切つて変わつておるので。

二人の間に漂う空気がピリピリと音を発しているかと思うほど、脳が過敏になり音一つでも戦闘は始まるだろう。齊天大聖の頬を伝う滴が地面に落ちると共にアーチャーは剣を斜めにすらしながら真っ直ぐに向かってくる、齊天大聖は地面に棍棒を叩きつけ地を揺らし棍を滑らす様に横に滑らすが、アーチャーは待っていたばかりに棍に飛び移り一気に駆け上がる。

齊天大聖は棍棒を捨て髪を千切り分身を作り、アーチャーを囲み一気に襲い掛かるが次々と切り捨てられ、数分もしない間に30匹近くいた分身は半分以下になってしまふ。アーチャーが最後の1匹を手にかけようとする瞬間を狙い、如意棒を斜め下から突き上げるが予期していたように剣を盾にして後ろに吹き飛びダメージを防ぐが、剣を守っていた結界が吹き飛び刀身をあらわとなる。

「確かに貴殿は武神と呼ばれるに相応しい、次は私の全力を受けて貰おう。」

アーチャーは中段に構え、剣に魔力を送つていく。

齊天は自身の膝が笑い背筋を冷たい汗が垂れるのを感じ、自身の持つ力を全て防御することに集中する。

・・・そして、広大な空間は光りに包まれる。

Side 美神

「お疲れ様です、美神さん。少し休憩しましょうか。」

小竜姫の合図とともに倒れこむ自身の身体に葛をいれ、立ち上がるうとするが膝が震えて立ち上がる事ができない。

近くにいた横島はおきぬちゃんと元気に話しているのに情けない！

横島が何やら良からぬ事を思ついたのか、にこやかな笑みを浮かべながら近寄つてくる。

「美神さん、自称マッサージ師のわたくしめがアロママッサージじしましょうか！」

とにかくアロマオイルを片手に持ちトランクス一枚で飛び上がった変態を神通棍で撃墜し、動かぬ脚のかわりにおキヌちゃんにタオルを持つてきてもいい。

Side 小竜姫

美神さん達の修業は順調に進んでますが、老師様は大丈夫でしょうか・・・心配で心配でじつとしていれませんね。

「美神さん、よければ温泉がありますのでそちらで汗を流しては如何ですか？」

「あらそつなの！是非入らしてもいいわ」

美神さんが喜んで立ち上がり、こぢらにおキヌさんと歩いてくる。後の横島は瞬時に立ち上がり美神さんの後を着いてきているが、何がやるきなのか心配ですね。

Side 横島

温泉やとーこれは神がわいにみろとのお告げや、げへへこの後は美神さんと小竜姫さまのヌードが見れるで。

「では、横島さん男性はそちりですので

小竜姫の声と共に横島は男風呂の暖簾をぐぐり、服を脱ぎ露天風呂のぞき見ポイントを探しあげじめる。

横島がポイントを発見し待機していると、湯気が濃くて見えないが女風呂の方角から話し声が聞こえる。

もう少しだ、もう少しでこの眼の前に理想郷が。眼を精一杯開いたがギヤグ担当の彼を世界は見捨てなかつた、強烈な爆発音と衝撃により地獄に引きずり落すことになる。

衝撃で木の上から落ちた横島は露天風呂に真っ逆さま入水し、水音を聞き付けた美神により拷問されることになる。

Side 小竜姫

美神を連れて温泉に来た小竜姫は老師のご飯を何にするか考えていた。

おキヌと美神は横で横島について話している、何やらビルの3階を覗くために登

り地面に落ちても何食わぬ顔で復活を果たすなど、彼はかなり特殊らしいと頭の隅に聞き入れ温泉に入ろうとした。

ドッガアアアン！・・・うわあああ、ザップーン！

「横島（横島さん）！！」

「美神さん！－違つんですよ、水漏れ直そうとして「だまらっしゃい」

後ろで悲惨な音が鳴り響く中、小竜姫は音の発信元へと急ぎ走つていぐ。老師の演習場の場所に近づくにつれて、あちらこちらに生々しい程の傷が広がつていき天井部もひびが入つていて

「齊天大聖老師さま！－・・・」これは一体！？」

小竜姫は啞然と立ち尽くし、老師の周りの光景を見て絶句してしまう。

演習場の真ん中では左腕を失い立ち尽くす老師が立つており、周りは荒野のように荒れ果てている。

「小竜姫よ、あの者は人であり人でない存在だ。丁重にもてなしてやるんじゃ、わしは暫らく天界に戻つて傷を癒していく。」

齊天大聖はそう言い残して姿を消した、残された小竜姫は荒野の始まりの場所に倒れ伏して少女を見つめ・・・頭を悩ますことになる。

「一体この少女は何者だったのですか？」

HIIヤ達の会議（前書き）

遊び心で書いたものです、あまつ本編と関係ありません・・・

H//ヤシロウ達の会議

『H//ヤシロウが最終的に到つた剣の丘、さう何人もH//ヤシロウが・
・

『おいーそつち〇・5? もズレてるぞ』

『何を言つ、貴様こそ〇・6? 左にズレてるではないか』

『まあまあ、落ち着け。多少のズレはかまわんだろ』

『貴様は黙つていの』『

そこに穏やかな空間は存在せず。

『だから、そこにグギを撃ち込めばぶざまになるこつたではないか
!』

『馬鹿者が、貴様に何がわかるここに打つと映える芸術がわからん
のか!』

そこに誤りは存在せず。

『そちらの剣が邪魔だな、破壊できるか?』

『ふむ、任してくれ。ふん!』

ここにひとつまた幻想級の模作が破壊される。

街が出来上がりつつある丘には剣も存在できなかつた。

・

・

・

・

・

『皆、席に着いたか

H//ミヤシロウ達によつて作られた壮大な会議室・・・まるでギリシ
ヤの神殿のよづだ。

『では、今からH//ヤシロウ達によるH//ヤシロウの為のH//ヤシ
ロウ会をひらく。なお、私の趣味で机は円卓だ!』

自らの趣味で円卓を創りだしたH//ヤシロウだが周りのH//ヤシロウ達

はそれどころではなかつた。

『やはり会議室なら紅茶より茶方がいいか、いやしかし……』『凛、私は次こそはやり遂げてみせるぞ』『イリヤ今何してるだろうか、風邪などひいていなければいいが』『……』『アルトリアの次の食事はつと……』『うほ！いい男全く聞いていない、一人妖しい奴がいたが気にしないとばかりに中指でかけていた眼鏡を押し上げる。

「フ・・・・」これはまさしくエミヤシロウに相応しい話し合ひだ、混沌こそ我々の始まりだ！！

司会役のエミヤもブツブツと喋り始め、止まることのないループが続く……

3日後　HIMIYA国會議事堂

「諸君……まず落ち着きたまえ由々しき事態だ。」

我に返るエミヤ達は背筋を伸ばし席に着く、鷹を思わせる瞳で司会を務めるエミヤを見つめている。

「我々の同士にしてエミヤシロウが赤い悪魔のうつかりで大変な苦行に向かわされていくよつだ、しかも！！性別も変化させられている・・・あまりにも不憫だが我々でしてやれるることは限られている。まずはこの写真を見てくれれ」

議会の壁に映し出されたのはアルトリアを紅色に染めた写真だった。

「！」の写真が今回の被害者エミヤAだ

写真を見たエミヤ達は口々に悲鳴やら歓喜をあげ叫びあつ。

「被害者は遠坂凛の魔術により世界からの束縛を回避することは出来たが、いつものつつきで性別の変更と並行世界に飛ばされてしまつたようだ。」

「凛！」「素晴らしいぞ遠坂！」「なんてことだ」「ククク・溺れたか衛宮士郎」「頼みはしたがこれは酷い・・・」「なんですか？」
口々に叫ぶヒミヤ達の声をテープルの呑く音で黙らせる同族ヒミヤ
「今回の被害者であるヒミヤシロウにまじの剣のHIBOOKをインストールしてやひつと思つただが皆の意見はどうだ？」「司会ヒミヤの声に満開一致のヒミヤ議会であった・・・

やつちまつたよ竜神様〈前編〉

齐天大聖とアーチャーとの腕試しが終わり、氣絶する彼女を抱えて寝室に寝かし美神達のもとへ戻った小竜姫は着替え終わつた彼女たちと合流して訓練を再開した。

「お待たせしました、では第二試合を開始しましょうか。」

待つてましたとばかりに法円に入つた美神から背丈^{シャドウ}2倍近くある女戦士の影法師^{シャドウ}が現れ戦闘態勢に入つた。

「禍刀羅守出ませい！…！」

小竜姫の一聲と共にまるで機械で創つた蜘蛛の模型に鬼の頭だけをつけました言わなればかりの全身黒の痛い召喚獣が地面から浮き出てくる。

「悪趣味ね…」「な…なんか痛そうなデザインンすね」美神と横島は呆れながらも呟くが酷い言いようである。

『グケケケケケケッケーーーー！』けたたましい叫び音と共に先ほど召喚された禍刀羅守は美神の影法師に襲いかかるが、美神は即座に後ろに飛び退き胸元の斜めの斬り傷だけで躲しきつた。

「あー…きつたねー！いきなり攻撃しやがった！！」「禍刀羅守…私はまだ開始の合図をしてませんよー！まったく私の言うことを見かないとはわかってるんですか」

文句を言つ横島と注意する小竜姫だが禍刀羅守は小竜姫に向かつて手であつち行けどばかりに動かしている、小竜姫の額に青い筋が一瞬浮かび上がつたのを見て横島が隣で悲鳴を上げかけていたがそんなことは今は気にしてない。

「つーのくされ妖怪…よくもやつたわね、この代償高くつくから

ね！！

口論の末に禍刀羅守と小竜姫が今にも一発即発になるかならないかと思われるときに、美神が最初のダメージから気を取り直し禍刀羅守に向かって影法師を向かわせ武器である薙刀を勢い良く振り落すが、禍刀羅守は自身の鎌のような前足で滑らし反対の前足で背中に鋭く突き立てようと振り下ろすが、美神の影法師は体を捻り何とか脇腹をかする程度で避けきつた。

今の戦闘で影法師の本体である美神は息遣いが少し荒くなっているのを確認した小竜姫は少し考えたあとに横島に近づいて行つた。

「仕方がありません、特例として助太刀を許可します。あなたの影法師を抜き出します。」「ちよ、ちよっとまって下さい、心の準備が！！」

問答無用とばかりに何かを言う横島の頭を掴み影法師を無理やり引張り出す、風とともに何かが形成されていき・・・「いつよ！こんち！またまつ！今日はいいお天気日和でげすなつ！」

はじけた口調の40センチ程の太鼓持ちの格好をした影法師が召喚された。

「こ・・・」こんな情けない影法師は初めて見ました。「

まさかと口元を引きつらせながら答える小竜姫に横島はその場で俯き「俺は平凡なバイト学生なんやしかたがないやんけ！！ここに来る他のやつと一緒にしんといてくれ！！」愚痴りながら地面にのの字を書き始める。

『姐さんこの男を買いかぶり過ぎでっせ。このとーり力もありまへんし使いもんになりまへんで！』と蹲る横島の頭を持つていた扇子でペチペチと叩いている。

横島の横でおキヌちゃんが慰めているが影法師のせいとよけいに哀れな光景に見えてしまつのはやはり彼の持つ雰囲気がそうさせているのだろう。

「くつ！」

横島たちが話【漫才】している後ろでは美神が疲れにより動きが鈍り始めてしまい、少しづつ禍刀羅守の攻撃が掠り始める。

「横島さんこのままじゃ美神さんが！！」

おキヌちゃんの焦る声を聞き横島は素早く自らの影法師を操りながら美神の近くに走り寄った。

「大丈夫っすか、美神さん！」

「なめるんじゃないわよ！私は美神令子なのよ！！」

先程までの情けない態度はなく、禍刀羅守を眺める横島に驚きながらも強気の口調で言い切り息を整え禍刀羅守に向かつてもう一度構え直す。

後ろで眺める小竜姫は横島の変貌を見ながら頸に手を当て横島の事を考える、その横のおキヌちゃんはおろおろとして眺めている。

「横島くん、少し耳貸してくれる？」

「えつ！まさか、ここでぶつちゅっと最後のキスですか！…ビリビリ」とこの横島、「ああ～」

美神の左斜め下から繰り出された拳は横島の頬に教本通りに決まり、回転しながら横島は空中を舞う・・・ぐつやち・どす・・・あまりの光景に禍刀羅守まで止まってしまう。

一番早く復帰したおキヌちゃんは何処から取り出したか木の棒でつんつんと横島だった物をつつき確認するがピクリとも動かない。

さすがに落下音がひどい氣がするが、この場に横島を心配してくれる者はこめかみを引きつらせる小竜姫と禍刀羅守しかいない。

「横島くん巫山戯でないで早くいらっしゃい。」美神の一聲で今ま

で赤い水たまりを作り出した横島は、がばりと起き上がり何事もなかつたかのように美神の前でへ口へ口と頭を下げている。

「まったくアンタって子つは！ ハア～・・・ 小竜姫様タイムね。とにかくいらっしゃい」 片腕をあげ小竜姫にタイムを宣言した美神はため息をつきながら横島の耳を引っ張つて歩いて行く。

タイムを唱えられた小竜姫は呆れながら禍刀羅守を見つめるが、先ほど勝手に動きだした禍刀羅守も先ほどのモザイク画を見てしまつていて腰が若干引けているため飛び込んで行こうとはしてはいない。タイムを取つた美神達はとくに岩陰に潜み3人ともしゃがみ込みぼそぼそと喋つてゐるが、美神に握られる横島の腕はコレでもかと言づぐらに絞めつけられている・・・逃げないだらうか。

「いい横島くん、アンタがあいつの視界を奪つてる間に私は後ろから近づいていつて斬りかかるから・・・ 失敗するんじゃないわよ」 横島は近づく美神の顔を前に恐ろしい程の汗を流し頭を立てに振る、ちよつぴり腕に胸が当てつてドキドキしてるのは横島だけの秘密だが。

「よし！ 行くわよ横島くん、作戦通りにするのよ」 美神のは気合を入れて立ち上がり小竜姫に準備万端よと言つてから舞台上に立つが横島は「わいは死ぬんやないやろか・・・」など咳きながらどんよりとした格好で影法師と一緒に舞台上に登つていく、まさにこれから階段を登つていく死刑囚の如く顔でブツブツとつぶやいている姿はあまりに儚かつたとか。

「え、え～とでは再開しますね。双方構えて、始め！」

作戦会議中ご丁寧に待つていた禍刀羅守は美神の影法師に不規則な動くで襲いかかるが、今にも斬りつけようとした途端美神が横島の影法師を禍刀羅守に向かつて投げつけ見事に顔に小さな太鼓持ちの影法師ががつしりとくつつき視界を奪い取つた。

「どんなもんじゃい！関西人舐めとつたらアカンぞ」叫びを上げる横島だが横島自身鼻水やら涙でひどい事になつてゐる、視界を隠されて閉まつた禍刀羅守は顔に付いた横島の影法師を剥がそうとするが手が鎌状になつてゐるためどうも上手く取れずにして、その隙に美神の影法師は上手く背後に回りこみ薙刀で真つ二つに切り裂くことに成功する・・・あと数センチ切ついたら横島の影法師も真つ二つだつたであろう。

「お疲れ様です、見事禍刀羅守まで倒してしまつとは私も少々貴方達を悔つてゐたようです。次は私が御相手しましよう。」そう言って舞台上に上がろうとする小竜姫に美神が条件を突き立てた「ちょっと、小竜姫様さすがに貴女が相手は分が悪いわよ。せめてさつきの時と同じように助つ人を使つていいかしら」なにやら呑む所がありそうな美神に気になりながらも小竜姫は構いませんの一聲で了解を出してしまつたのは彼女の偏見のためであろう。

美神と言つ女は汚い手は天下一品なのを知らなかつた、いな氣づけなかつた彼女のミスだらう。

美神は横島とおキヌちゃんを呼びこそと喋り始める、一方小竜姫はつけていた装備を外し身軽な格好にする。

「よつしゃーーやつてやろうじやないか。ハア、ハア」ちょっと危なげな動きをする横島の手つきとその血走つた眼はヤク中じやないかと思われる、さすがに他のメンバーは引きつった顔で舞台上にたつてゐる。

「あの・・・そちらの方は大丈夫ですか、何故か凄い気合がお入りのようですけど・・・」

ちょっとあれの相手は嫌だなと思つてしまつた小竜姫がいても仕方

がないが美神は同情の眼差しで大丈夫よの一言で片付け戦闘態勢で待機する。

小竜姫も諦めて構えを取ると、体から龍氣を出し美神と同じ影法師の背丈まで巨大化し開始の合図をして休めの状態をとる。

ただ併むのその小竜姫の姿は一見無防備に見えるが無言の重圧が体にかかる、美神の背筋に一滴流れ落ちる汗と脳内で繰り返されるシユミレー・ショーンは敗北の気配しか漂わせない。

試しに近くに居た横島 影 を投げつけるが軽々と躊躇され地面に叩きつけられてしまつた。

(これはさすがにピンチね、切り札の一つは投げちゃつたしたぶん生きてるわよね) 隣でぴゅりゅぴゅりゅと頭から血を流している横島を無視して先ほどの一連の速さに舌を巻いた、流れるような体さばきにあの叩きつけた時の威力・・・何故横島が生きているかわからぬほどだ。

一方小竜姫も内心焦っていた(まさかあそこで味方を投げつけてくるなんて恐ろしい人ですね、そのやり方はまさに魔族のようなやりかたです。それにしても先ほど投げられた影法師は何故微笑んで飛んできたのでしょうか?まさか先ほどみたいにしがみついてくる気だつたのでしょうか!?)

ぴゅるぴゅると血溜に横たわる横島は奇跡的に生きていた、いや靈力はバンバンと上がつてきているが。影法師が小竜姫様の後ろ姿を見える位置から少しづづゾンビのように這いずりながら足元に近づいている。あと少しで届きそうだが小竜姫にバレずにココまでいくこいつたちは半端じゃない。

「挑んでこないのですか?ならば」ちらから行きます。」

小竜姫の言葉と共に目の前に現れる刀を何とか薙刀で流すがあまり

の威力の強さに後ろに後退してしまったが、小竜姫の攻めはドンドンと勢いを増していく。

美神の影法師が守りに入ったのを見た小竜姫は体のリミッタを外し超加速状態に入り足払いを仕掛けた。当然ながら美神の影法師は足元にきた突如の攻撃を避けることも出来ず、背中を強打して薙刀を落とすが素早く背後に飛び退き距離をはかる。

「何よ今の一あんなの防げるわけないじゃない……」

あまりの出来事に唖然として前方に落としてしまった薙刀の回収方法を探す、小竜姫は一時超加速状態を解き体にかかつた負担を和らげると一気に美神の影武者に詰め寄り今にも斬りかかるとするが、その時後ろからがつしりとしがみついてきた先ほどまで地面に伏していた横島 影 が抱きつき小竜姫の胸を揉みしだく、すると突如と小竜姫のサイズがどんどんと縮こまりもとの小竜姫に戻ってしまう。

「背中からいきなりむ、むむねを触るとは何事ですか！？」「ああ、やらかいわ、この中も入つたるで。」

小竜姫が後ろについた影法師を引き剥がそうとするがどんどんと首元からすっぽり入つてしまつた影法師は下の方へと降りていき、外で叫んです小竜姫を無視して背骨の辺りの鱗を見つけ触つてしまう。触る瞬間に小竜姫のダメとの言葉があつたが間に合わず、小竜姫の体から光が発しられみると龍神の姿になり舞台に火炎を吐きだし天に向かつて吼えかかりすぐに視線を美神たちの方へと向けて火炎を吐きながら迫ってきた。

「ちょっとあんたなんてことするのよーあれ何とかしなさい！？」

「あんなん知りませんやん、俺何もしてませんって！？」「そんなことより、なんとか怒りを鎮めないと……！」美神と横島が小竜姫の吐く火炎を避けながら言い合つて、後から逃げてきたおキヌちゃんに止められてふたりとも小竜姫の方へ向き直るが『あれ

は説得の通じる状態じゃないだろう……』と練習場を破壊し、わり絶好調の龍神様 小竜姫 をみて急いで出口を探すが舞台が壊れため影法師も消えてしまい生身の体のみで歪みの空間を探すために……。

side アーチャー

「ijiは・・・」

目が覚めると見覚えのないベッドの上で頭に何やら吸盤らしきものを付けられ縛られていました、てへ・・・ではないわ！！なにやら氣を失っている間に怪しげな装置から伸びる吸盤が頭にペツチョリとくっついているがその怪しげな機械からすると脳波でも見ていいのだろうか？

扉の開く音共に一人に女性が入ってくる「目が覚めたのね～、そんな怪しいモノじゃないから心配しなくていいのね」

何処をどう見れば怪しくないかわからないが全身タイツのような服を着た女性は近くのテーブル台にポットを置きカップに飲み物を満たしていく、さてはて何を聞きうべきか。

「失礼だが少々質問させてもらつて構わないだろうか？」アーチャーの言葉に女性は「いいのね～」とまたたりとした口調で2つ置いたうちの片方のカップを取りベット近くのいすに座りながら中の飲み物を冷ましながらちびちびと飲んでいく。

「やうだなijiはijiでの機械は何かね」場所と自身の頭に付いてるこの怪しげな機械をしながら質問するアーチャーに女性はにこやかにここには妙神山の客の間なのねといい、その後機械の前に立ち自慢げに胸を張りながら「これは私が開発した人体解析装置なのね」などとまるで幼い子供のような無邪気さで紹介し始める・・・

彼女はちょっと大丈夫なのかと心配するほどだ「失礼なのね！！私は大丈夫なのね！！」おつと思考を読むとは驚くところだが、まさかモノノ怪のたぐいか？「これでも神様なのね！ヒヤクメ様のね」なんとまあ、この世界には神様がうようよといふみたいだ先ほどの猿といい困つたものだ。

アーチャーがヒヤクメにこの世界の状態を聞きだし終えようとした頃、凄まじい地響きと共にもくもくと立ち上がる煙に一人は言葉を失つた・・・『何が起こつた（のね）』

二人は急ぎ煙のする方に走るが向かう先は風呂場に暖簾のような奥にある扉から発生していた。

やつちもひたよ龍神様《中編1》（前書き）

短いです・・・

やつちまつたよ竜神様〈中編1〉

煙を上げながらガタガタと震える扉をエミヤヒヤクメは畠然とした姿で眺めていた。

見事に扉付近の壁はひびが入り今にも崩れださんと言わんばかりにポロポロと塗装が剥げていく、生睡をひとつのみ震える膝に渴を入れて取つ手に手をつけるが、後ろからヒヤクメの肌白い手によつて止められる・・・

彼女は首を横に振り微笑むが明らかに目元が引き攣つている、私自身もヒヤクメに首を振り返して腕に力を入れて一気に扉を「ありました美神さんここですよ！！」聞いたことのある声と共に勢い良く開かれる扉に顔を強打した私はあまりの痛さに口から出る言葉と共に床を「ロ」「ロ」と転がり続けた。

「ありました美神さんここですよ！！」横島は広大な広さを誇る演習場の出入口を見つけ勢い良く扉を開け放つと、そこには「うがああ」と奇妙な声を上げながら地面を転がる少女とその少し後ろで目を回した女性が倒れていた・・・ナニコレハ？

一瞬止まつた横島を龍神の叫び（小竜姫）を聞き我に帰つた、後ろから走つてくる美神とおキヌちゃんを先に行かせて少女と女性を担ぎ上げ後を追いかける横島。

横島が走りだした瞬間に後ろの扉が吹き飛び中から龍神が炎を吐きながら周りを焼き尽くしていく、建物の彼方此方に火がつき机の上の花瓶が落ち吊るされているライトも地面に落ちて砕け散っている。門前の広間に出てる頃、横島の腕の中でばたばたと涙目になりながらも暴れは始めたアーチャーは何とか横島の腕の中から抜け出し彼の腕からヒヤクメを奪い取り頭を右手で摩りながら横島の隣を走る。

一人が門に到着しようとした時に突如と横を走っていた横島が目線から消える、門の外にでて後ろを振り返ったアーチャーの眼の前に写つたのは器用にバナナを踏み頭から床に倒れこんだ横島の哀れな姿だった。

燃える屋敷をついに屋根を突き破り出てきた、小竜姫を見た美神たちは門の鬼門達に門を閉じるように促しあわれに横島は門内で閉じ込められるハメになつた・・・

門内の横島はと言つうと「ちょっとー美神さん出してくださいよ、あれは死んでまいりますってー！」扉を一生懸命に叩いていたりする。

扉を叩く音が聞こえて数秒後、中から横島の悲鳴が辺りを響き渡らせつた。

横島自身は龍神の吐き出す火炎を紙一重で避けて何とか門を開ける方法を探し、時々自らの手で龍神の体をペシペシと殴つているが全くもつて効いていなかつたりする。

（くつそたれがー、このまま死んだら死んでも死にきれんちゅうに。こう何かドカンと吹き飛ばせそうなもん無いんか！）横島の力が徐々に手のひらに集まり始めているが本人はまったくもつて気づいていない、今も飛び火がジーパンの一部に飛び移り走り回つている。徐々に横島自身により位置が先ほど離れた門へと近づき遂に門に追い込まれる、「はー？いつの間にか追い込まれとるやないか、ワイの馬鹿。嫌やー！死んでまう、誰か開けてくれー！」血走った目でバンバンと手のひらを扉に叩きつけていた横島の手から何やら一つの球が転げ落ち、一瞬の光と共に大きな音を立て開ききられた門が横島の体を外へとほり出したが頭上を龍神が凄まじい速度で過ぎゆき、門の外の一同は顔から血の気が引いていくのを感じていた。

やつひもひたよ龍神様《中編2》（前編）

続や（・・・）

やあちまつたよ竜神様（中編2）

長野県ピ－市のとある山の中

夕暮れがかかる山々の道を男たち30人程のバイク乗りたちが最後の唸りをあげて走っていた。

先頭を走る真っ赤なバイクはフロントからバックまで改造されており、ボディに刻まれている兎の愛らしさがまさに男たちの憧れの車体になつていおだらう。

日が暮れかかる頃、遂に男たちの最後の旅は終わり小さな池のほとりの開ききつた広場に集まつた。

この場所は男たちにとって特別な場所であり、最後を飾るのには絶好の場所である。

先頭を走つていた男は、まだがつっていたバイクから降り後ろを振り返る。

一人ひとり自分自身の後を必死に付いて来てくれた若者たちの顔である、ひとつひとつ思い出が今にも思い出しそうになりながら、口にたまつた唾を飲み込み足を前に踏み出す。

男が降りるのが合図のように周りの者もエンジンを切りライトを男の方へ向けて姿勢を正していく。

男の身長は決して高くないが、辺りを包み込むような暖かさと勇敢さがあることはこここの者たちなら皆知っている。

この集まりも所詮は何処にも属せずにあぶれてしまつた若者たちの集まりである、誰にも必要とされず何をするかも分からならなくなつた少年達をしっかりと前を向いて生きていくように男が導いてきた実績の結晶である。

辺りが静まり返り男はもう一度周りを見渡す、じつと手のひらが熱くなり閉ざされた口が重々しく開いた。

「皆、最後のイベントに参加してくれて有難う！今日をもつて俺は

この「さざん族」から抜ける事となつた、後任はこっちの柏木がやるから心配するなや。今まで俺の後を付いて来てくれて本当に有難う・・・

「さざん族の名前は不評であつたがこの族はまさにもう一つの家族であった、集まっているものの中にはすすり泣く奴やら、号泣してしゃがみ込む奴などたくさんいたが男エイキチは眉間にシワを寄せ目頭から流れる涙を上に向くことで『まかす。

「オトン！」上を向くエイキチに一番可愛がつていた健が呼びかけ、体にぶつかる衝撃と共に鮮やかな真っ赤なバラの束が腕いっぱいにエイキチの胸に叩きつけられた。

「これは皆の気持ちやから、この族皆でしつかりまとめてみるから」顔を情けなく歪ませながら不器用に笑を浮かべて花を袖で拭い上げる。

エイキチは健の頭をその少しづつ汚い手でこねくり回し、ありがとうありがとうございましたと花で顔を隠しながら涙を流した。

今年で就職のためにエイキチにとつてこの自分の息子達を捨てることになるのは究極の選択だった、しかし息子達は自分の思っていた以上に成長して大きくなっていたことに感激していた。

しかし、ここには非常識な世界そんなに世の中あまくなど鼻で笑うかのように周り一体を龍氣が覆い尽くした。

「おい！あれを見ろよこつち向かつてくるぞ。」ざわざわと周りが騒がしくなつてくるのを感じエイキチが顔を上げると、隣の山から龍の形をしたなにかがこちらに向かつて火を吐きながら向かつってきたのである。

驚くつさざん族達はエイキチを守りうと前に出るがエイキチは早く逃げるよつに促す、しかし誰も聞こつさせずに動きもしない。

目の前に炎が迫ろうとした時に奇跡は起きた、目の前には一匹の狐が飛び出し龍と向かい合つかのように立ちふさがったのである。あまりの可愛さにきゅん！ときたエイキチだが、すぐさま考えなし狐を抱えて皆に散会するように怒鳴りつけた。

怒鳴りつけられた、者たちはバラバラになり一気にバイクに飛び乗りかけていく。

辺りが火の海になりながらもかけるその姿は仮面ライダ？のようだつたという、エイキチの腕の中でもがく狐が光を発し始めたのはそのままの直後だった。

狐は着物を着た美少女となり唖然としたエイキチを突き飛ばし、美女少女は龍の元へと駆けていった。

少女は起こっていたそれはもう頭から煙が煙が出るくらいに、殺生石から起きた少女をまず待っていたのは火の海であり大事なしつぽを少し焦がす程の火の海であった。

少女は空を飛ぶ龍が原因とわかるや龍の顔面に一発をかますために走り、今にも燃やされそうな人間を一応守り今から蹴りをかましてやろうとしていた所を抱え込まれ走られたのだ。

結構なタイムを食らってしまい、余計にいらついているのだ。

何とか龍の見える場所まで来てキツイのを一発かまそっとしたところ、後ろから声をかけられた。

「君は一体何をしようとしてるのかね」と・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9116m/>

エミヤinGS

2011年9月9日17時10分発行